

第 1 章

Can we do it?

博麗神社は、その建立以来未曾有の混乱の中にあつた。数ヶ月前に倉庫に隣接して増築された建物の中で、神社の巫女・博麗霊夢は不機嫌に腰掛けていた。

「南方警備隊より入電！『敵は戦車らしきものを多数伴う』です！」

幻想郷では珍しいスタイルの——外界の知識がある者なら、それを軍服のようだと形容するだろう——服を着た妖精が駆け込んできて、手許のメモを読み上げた。霊夢は頭を抱えた。ここは幻想郷ではなかったのか？ 隙間妖怪の得体の知れない目論見にまんまと引っ掛かり、道化を演じさせられているのではないか？ 死んだような目で卓の向かいの茨木華扇を見ると、呆然とした様子で眼下の地図を見下ろしている。地図の上に敷かれた透明な覆い、オーバレイに記された記号によって部隊の配置が記されていたが、それを見ればその理由は一目瞭然である。青地で描かれた味方部隊の殆どは遥か西にある妖怪の山で作戦中だ。撃退こそしたものの、既に博麗神社へと通じる石段の下まで敵前衛が侵入したという報告すらある。彼女達の手許にある戦力は僅かに一個小隊弱。尚悪いことに、この小隊は固有の対戦車班を引き抜かれていた。霊夢は「総力戦のしおり」と書かれた手作り感の漂う小冊子を憎悪の籠った視線で睨み付けると、ゆっくりと立ち上がった。

配分した対戦車地雷による近接戦闘で撃破する。何か質問はある？」

華扇の自信に満ちた——霊夢の印象からするといささか無理に装っている感が否めない——言葉に、全ての班を束ねる小隊長が手を挙げた。単にリーダーシップが比較的優れていたというだけで五十六名を率いる存在となった彼女は、二半年間でかなり立場に馴染むことに成功していた。小隊長に任命された翌日に切った髪は、今は肩まで程度の長さまで伸びている。

「それでは、敵が歩兵を先頭に立てて攻撃してきた場合に対処ができません。我々に有効な対戦車火力を配属することをお願いします」

真っ直ぐ華扇の目を見据えた請願に、華扇は空しく首を振った。

「悪いけれど、対戦車砲の類は全部山のほうに行っちゃってるのよ。だから、現有戦力で我慢して」

組長の顔に失望の色が浮かんだ。背後に控える班長達も顔色を変えて耳打ちをしあっている。

「その代わり」

華扇の言葉は終わっていないかった。さらに続けて、こう言った。

「私と霊夢が、貴方達の支援の下突撃を敢行するでしょう」

「結局私が出るんじゃない。これじゃいつもと変わらない」
霊夢が石段を降りると、妖精達が慌しく走り回っていた。めいめいが武装している。ある者は小銃を、ある者は機関銃を。しかし、よくよく見ればその一部の持っているのは幻想郷ですら時代遅れに近い火縄銃だし、中には槍で武装している者すらいる。寄せ集め、という言葉が霊夢の胸に去来した。

「こんな連中に頼らなくても……」

言いかけて、霊夢は服に貼られた一枚の符を見た。「ゲームシステム上の都合」と称してこの戦いの参加者全てに貼られたこの符が、霊夢の、そしてその他全ての力ある人妖のスタンドプレーを妨げる。霊夢は焦れつつも思った。最後の最後、決定的な瞬間まで後ろで事態の推移を見守っていなければならない。こういう戦いは、霊夢にとって初の体験だった。

「とりあえず霊夢は私の傍にいて。当面の指揮は私が執るから」

華扇はそれだけ言うのと兵達に向き直り、急拵えの「士官」妖精達に指示を与え始めた。

「各班はあらゆる火力を用いて歩兵を制圧、これを戦車から分離すること。歩兵の援護なき戦車など恐るるに足らないわ。歩兵を釘付けにしたところで突出した戦車を各班に

「えっ私!？」

霊夢は突然の指名に面食らつて、よそ見していた視線を妖精達へ向けた。妖精達からの視線には、霊夢と華扇、二人への尊敬の念が籠もっている。霊夢は頬が熱くなるのを感じた。妖精の前で情けない真似もできないと、霊夢は気を取り直す。要するに、先程自分が考えていたことと同じだ。自分が暴れることで事態が解決するなら、こんなに楽なことはない。笑顔を作つて、居合わせたもの全てに宣言した。

「しっかり援護しなさい！ それさえしてれば、私があんた達を勝利へ導いてあげる！」

こうした芝居がかった台詞は最初こそ慣れなかったが、戦略上必要だと文に言われて渋々やってみると、案外と楽しかった。ほんの少しいつもと違う自分を演じるということには、どこか奇妙な快感があつたのだ。程なくして、履帯が軋む音と奇妙な駆動音を伴い、敵本隊が出現した。戦車は三両で、その先頭車両には誇らしげに真紅の旗が掲げられている。紅魔館だ。

その先頭車両の砲塔正面に取り付けられたハッチが開いた。霊夢が双眼鏡を覗くと、今まさにそこから何者かが姿を現すところだった。特徴的な銀髪は、見間違えようがない。十六夜咲夜だ。何か奇妙な箱を携えている。あの箱は

なんだろうと思っている間に、咲夜はそれを霊夢達の方へと向けた。すわ攻撃かと華扇が身構えたのが雰囲気であったが、霊夢の勘はそれが武器でないことを報せていた。

「あー、本日は晴天なり。……問題無いわね。こちらは紅魔館の十六夜咲夜中佐。貴方達に降伏を勧告致しますわ」

機械的に、あるいは魔法的に増幅された声が霊夢の耳に届くと、彼女は眉を顰めた。華扇が意思を確かめるように視線を向けると、霊夢は決然として首を横に振る。兵達も一時の動揺こそあれ、霊夢達の様子を見てすぐに落ち着いた。咲夜は数分待ち、博麗神社側に動揺が見られないことを見て取ると、感心したようにため息をついた。

「ふむ、なかなか勇敢な妖精達が揃っているのね。じゃあ、実力を以て決着を付けましょう。以上、放送終わり」

咲夜が言い終えて何かの身振りをした瞬間、展開を終えていた三両の戦車は一斉に発砲した。

喊声が上がると、紅魔館の兵が突撃してくる。戦闘が始まった。

「げっ」

背後の爆発音に振り返った霊夢は、石段が砲撃で崩れ落ちていたのを発見した。

「当分参拝客は期待できないわね」

「戦争やっている時点で参拝客どころじゃないでしょ！

増援を遮断するつもりだろうけど、運が良かったわね」

華扇が皮肉げな笑みを浮かべた。

「この向こうにまともな増援なんて一人も残っていないじゃない。全く、文の奴、念には念をとか言うから」

その場にいない文をなじつてから、霊夢は文に伝令を飛ばすことを思いついた。

「適当な妖精を見繕って軽装で飛ばせば、文と連絡が取れるんじゃない？」

「やってみる価値はあるわね。といっても途中で捕まるリスクはあるから……三名くらいを選んで別々に向かわせましょう。人選は私がしてもいい？」

霊夢は直ちに承認した。妖精達個人個人については華扇のほうが詳しい。

直後、陣地から無数の銃声が聞こえ始めた。三百米まで引きつけて射撃しろとの命令に従った妖精達が、各班長の号令により射撃を開始したのだ。先頭を走る紅魔館の妖精達が次々と「一回休み」になっていく。

生き残った紅魔館側の妖精の反応は素早く、辺りの窪地などに身を隠す。陣地に陣取るが火力に劣る博麗神社と、暴露地形に展開するが火力で圧倒する紅魔館。戦闘は膠着した。しかしその膠着は互角を意味するものでなく、次々と撃ち込まれる戦車砲弾によって博麗神社は消耗を余儀な

くされている。このまま戦闘が長引けば、やがて戦線は崩壊するだろう。土気の低下も見逃せない要素で、このようなモグラ叩きのモグラを延々と演じていては、妖精達の気力が萎えてしまうことは明らかだった。その様子を見て取った華扇は、霊夢に告げる。

「私達が前に出るなら、今において他にないわ。私が左翼から出るから、霊夢は右翼からお願いわね」

霊夢は頷き、心なしか足取り軽く陣地へ向かった。

「いい、私が出るから、その間敵の歩兵連中の頭を上げさせないで。あの戦車とかいうのは私がぶつ飛ばしてやるから」

霊夢の言葉に、陣地最右翼を固める第三班の妖精達は頷いた。それを確認すると、霊夢は陣地から舞い上がった。

霊夢が飛び出すと、すぐに背後から激しい銃声が聞こえた。敵陣に対する制圧射撃だ。効果はかなり上がっているらしく、霊夢のところへ飛んでくる銃弾は多くない。そして、この程度の密度の弾幕であれば、霊夢にとっては有ってないようなものだ。音速を超える小銃弾も、霊夢を目前にすると奇妙に軌道を歪めて逸れていく。

霊夢は自分の能力——空を飛ぶ程度の能力——の有り難さと思った。多くの人妖は今回の戦争では仕組み上空を飛ぶことが難しい。だが、霊夢の力は、そのようなシステム

に縛られるほど脆弱なものではない。あつという間に敵の後方に辿り着くと、一台の戦車を射程に収めた。

とりあえずパスウェイジョンニードルを放つてみるが、金属同士のぶつかる鋭い音が聞こえるばかりで損傷は与えられていないようだった。霊夢の武器は基本的に妖怪を退治することに特化しているから、無機物に対してできることは多くない。スペルカードを発動してもいいのだが、霊夢の勘が時期尚早だと告げていた。なら、簡単なこと。戦車そのものでなく、乗員を狙えば良い。狙いを付けた戦車に一気に接近する。

戦車長と思われる妖精がハッチから慌てて顔を出し、対空銃座に取り付いた。機関銃が火を噴き濃密な弾幕が張られる。しかしそれらは空しく霊夢の傍を掠めていった。その様子に何を見たのか、戦車長は恐怖の表情を浮かべて再び車内に潜り込んでしまった。

十分に距離を詰めると、空間も、装甲も、全てを飛び越えて、霊夢は車内に飛び込んだ。狭い車内で展開される戦いは、数秒のうちに終わった。

ハッチから飛び出した霊夢を迎えたのは、彼女を包囲する無数のナイフだった。飛び来るナイフの隙間を直感的に縫って脱出する。背後から飛んでくるナイフを警戒しながら、霊夢は咲夜を睨み付けた。

「流石。あの程度ではやられてくれないわね」

咲夜は無感動に言った。

「結局こうなるんじゃない。ご自慢の兵隊達は飾り？」

霊夢は挑発するように言ったが、咲夜は動じない。

「いいえ、彼女達は皆役目を十分に果たしているわ。現在進行形でね」

霊夢が見下ろした先では、彼我の妖精達が熾烈な戦いを繰り広げていた。

「よくやるわね。妖精の割に」

「うちのメイドは優秀ですわ」

「そ、じゃあ、私のところのもそう悪くないのね」

少しの沈黙があつて、両者は激突した。

先手を打ったのは霊夢だった。広範囲にばらまいた封魔針で行動を制限しつつ残された回廊に陰陽玉を投げ込む。そしてその陰陽玉を盾にしつつ。瞬時に咲夜の死角を取った。そのまま封魔針を展開する。一瞬でも判断が遅れば、先程の封魔針と挟まれて退路はなくなる。大抵の相手ならばこれで撃退できるが、霊夢の勘は手応えのなさを霊夢に報せた。その刹那、案の定咲夜は消え、代わりに無数のナイフが現れた。首尾良く時間を止めたらしい。ナイフの包囲環が閉じきる前にその後ろの隙間を脱出する。その途中、また何か嫌な予感がした。霊夢はその予感を信じ、スペル

ということはあるまい。フランドールはともかくとして、レミリアやパチュリーが含まれる可能性はあつた。霊夢は駆けだした。

沢伝いの道を走っていくと、両側が崖になった曲がり角がある。霊夢は付いてきた華扇に既に陣地が築かれていることを固めるよう指示を出すと、更に先へと向かった。視界が開け、河童橋（戦車が通行可能なよう最近になって架けられたものだ）が見えてくると、ちょうど何両かの戦車が渡河しているところだった。飛び込んでいっても何にもならないだろう。霊夢は戻ることにした。

「霊夢、元気がないわね」

華扇の言葉を背に、霊夢は逡巡した。いっそ白旗を掲げた方が手取り早いのではないかと、自分らしくもない煮え切れなさを腹立たしく思いつつ、霊夢は華扇の方を見た。華扇の顔には、疲れこそあれ迷いは見られない。妖精達はいえ、泥だらけの姿ではあつたが、むしろ楽しそうですらあつた。霊夢は決断した。

「勝つにせよ、負けるにせよ、徹底抗戦で行くわよ。考えてみたら文達がいるんだし、ここで負けても終わりじゃないしね。……神社には暫く戻れないかもしれないけど」

「聞いた通りよ！ 残弾を確認して、配置につきなさい！ 敵をあつた崖に突き落としてやりましょう！」

カードを宣言した。

「夢想封印 瞬！」

包囲環の切れ目目指して向かっていったナイフの群れは巨大な霊力の塊にはじき飛ばされて消えた。そして、それら霊力は色鮮やかな実体となつて、咲夜の方へと飛んでいく。次の攻撃に集中しすぎていた咲夜は、これらを避けきることができずに弾き飛ばされた。

「ほらほら。歩いてお帰り。あんたがやられたら妖精達だって時間の問題でしょ」

勝ち誇つた霊夢は、ようやく起き上がりとしている咲夜に大幣を突きつけた。背後では華扇の背後からの攻撃を受けた紅魔館の兵達が総崩れになっている。

「本当にそう思う？」

立ち上がった咲夜は、服に付いた埃を払いながら不敵に笑つた。銃声に混じつて、遠くから戦車の走行音が聞こえた。

「戦車と戦つて、スペルカードまで使つて、果たして貴方達にアレが止められるかしら」

嘲笑するように言つて、咲夜は消えた。時間を止めて味方のところへ向かつたのだろうと霊夢は推測した。

咲夜は明言していないが、あの中に戦車と兵しかいない、

華扇の言葉は霊夢からすると存外に過激だった。しかしそれは、どこか頼もしくも思えた。

「霊夢、これ」

華扇は、霊夢に銃を手渡した。ザシリと重く、その全体を覆う木製部分は亜麻仁油で鈍く輝いている。

「使い方は知ってるでしょ。霊力の温存にもなるし、持っていて。これが弾薬」

霊夢は頷いて銃を受け取つた。河童の手によるという、半自動小銃だった。今配備されている外来の骨董品と違い、引き金を引くだけで次の一発が自動的に装填される。槓杆を引いて最初の一発を装填した直後、崖の方で銃声が轟いた。ついに戦いが始まったのだ。

陣地に籠もる博麗神社側との接近戦に、紅魔館は苦戦を余儀なくされた。道は狭く、隠れ場所はない。歩兵にとつてこれほど戦にくい戦場もない。後ろに控えていた戦車が直ちに投入された。霊夢は先程のように車内に飛び込むことを考えたが、霊力のことを考えるとやめた方がよさうだった。考えた末、霊夢は陣地に飛び込んだ。

「これ借りるわ！」

「わっ、わかりました！」

縮こまつていた兵の一人から強引に対戦車爆薬を奪い取ると、陣地を飛び出した。飛翔の霊力にすら事欠いている

ようだったので、飛ぶのは諦めた。代わりにその霊力を使って小刻みに跳躍を繰り返して、射撃を回避していく。それでも、あちらこちらの布が銃弾に引きちぎられるのを感じた。首尾良く戦車の側面に飛びついて、砲塔後部のバスルと呼ばれる張り出しの下に爆薬を押し込み、点火。直ちに飛び退くと、数秒の後に戦車の砲塔は前のめりに転げ落ちた。陣地から歓声が聞こえる。

しかし、霊夢はそれに応える気にはなれなかった。何しろ、目の前にもう一両の戦車が迫っていたからだ。砲口は真っ直ぐ霊夢を見据えている。そしてその背後には、さらに二両が控えていた。

「嘘でしょ……」

霊夢は目を閉じた。撃たれても「死ぬほど痛いだけ」というのは知っていたが、それでもその殺意をむき出しにした砲口に直面しては、そうせざるを得なかった。砲声が聞こえた。熱い空気が衝撃波と共にやってくる。しかし、それだけで。痛くもかゆくもない。不思議に思った霊夢は目を開けた。そして驚愕した。目前の戦車は炎上していた。

後続の戦車は慌てて砲を右の何者かへと向けようとしていた。目標に狙いを付けたらしく、そのまま発砲する。しかし、鈍い金属音と共に砲塔に何かが飛び込み、動かなくなった。紅魔館の兵達は騒然としている。そこに次々と砲

弾が降り注ぎ、混乱を助長する。そして、霊夢の他に誰もいなくなった。直後、霊夢の目前に舞い降りる姿。射命丸文だった。

「いやあ、してやられましたね。まさか幻想郷の南端からこんなところまで一気に攻めかかるとは予想外でした」

「えー。何があったの。今でも状況が飲み込めてないんだけど」

「そちらからの伝令を受けて対戦車砲を引っ張ってきたんです。ほら、あそこ」

文が指差した先には、妖怪の山の一部をなす丘があった。よくは見えないが、数名の人影が飛び跳ねているのが見える。

「死ぬかと思いました。あそこまで車で牽いてたら間に合わないの、担いで飛んだんです」

肩をさすりながら言う文に、霊夢は一瞬嬉しそうな笑みを見せたが、何かに気付いたように表情を強張らせた。

「考えてみたら、さっきの弾、私に当たるかもしれないじゃない」

「大丈夫です。霊夢さんがあの程度回避できないわけがありません」

「……大丈夫です。死にませんから」



暫しの沈黙の後、霊夢が全力で振り下ろした大幣が文の脳天を直撃した。文は悶絶してそこらを駆け回っている。「ところで、あいつらを率いてたのって、誰なの。出てこなかったけど」

「うう……その大幣、退魔の力があるから死ぬほど痛いんですよ？」

「質問に答える！」

「ひい、レミリアさんが指揮官だったんですけどね、彼女達の行進経路が長くてラッキーでした。途中で魔法の森の軍勢と遭遇したので、そちらを押しさえ込むに回ったようです」

文は少し姿勢を低くし、頭をさすりさすり答えた。

「私達は魔理沙達の片手間ですらとっつけられると。舐められてるわね」

「そこまでのリスクを冒してまで真っ先に潰さなければいけない相手と思われていたんですよ。多分、舐めていた魔法の森に横腹を突かれたというのが正しいです」

「先が思いやられるわ」

霊夢は深いため息をついた。そもそもどうしてこんな「戦争」が始まってしまったのか。紫に言いくるめられたあの日のことを、霊夢は思い返した。



†

みんなという蟬の声がそこから聞こえる。高い気温にうんざりして現実から意識を逸らそうとしても、今は真夏なのだとかぶその声のために、その努力はむなしものとならざるを得ない。どこか蟬のいない、つまりは木のないところはと探してみれば、鬱蒼とした森の中に一点、開けた場所が見える。博麗神社、この幻想郷で、ついこの間まで唯一の宗教施設だったところだ。ここ数年で同業他社が次々と旗揚げしたために、この神社に集められるなげなしの信仰はついに枯渇し掛かっていた。

そんな神社の主はそれに危機感を覚えているのだろうか。少なくとも、縁側で干物になり掛かっているこの姿を見た人は、危機感ありとは考えないだろう。幻想郷の安定に欠かせない鍵である博麗の巫女・博麗霊夢は、縁側にだらしなく寝そべって顔を歪めていた。

「一年を四つに分けたのはどこのどいつよ。二つで十分なのこ」

誰ともなしに夏と冬への怨嗟をぶつける彼女に答える者はいない。幻想郷の物好きな妖怪や、あるいはそれと見分けのつかない人間達も、この暑さに気力を削られたのかここ数日神社にはやってきていなかった。